

パリ襲撃犯を警察があらかじめ知っていた新データ

【訳者注】この事件が、今年 1 月のシャルリ・エブド襲撃事件と筋書きが同じであることが、これによくわかる。犯人たちはすべて、よく知られ、住所も知られた、最高度の要注意人物だった。「テロ集団とフランス情報部の緊密な絆を考えなければ、説明できないことだ」と言っている。海外では、アサド討伐のためのテロ活動に利用し、国内では、ファシズム体制強化のための口実に用いるという手口は、アメリカでも、今後起こるであろうこの種の事件でもすべて同じだろう。このパターンがわかっているにもかかわらず、メディアは知らないふりをしていなければならない。ここには書かれていないが、この襲撃の日には偶然、フランスで同時多発テロの訓練が予定されていた。

By Kumaran Ira

November 27, 2015

パリの 11 月 13 日テロ襲撃以来、襲撃を主導したイスラム主義者たちが、130 人を殺したこの襲撃の前に、情報局によく知られていたという証拠になる、さらに新しい事実が明るみに出た。

こうした詳細はきわめて大きな政治的意味をもつ。それは、襲撃犯たちが、フランスとヨーロッパの情報局の監視をすり抜けたという公的主張に矛盾し、新しい襲撃を防ぐには、恒常的な非常事態宣言と警察国家的手段を、受け入れるよりほかないという公的主張にも、矛盾するからである。テロリストたちが、このような大規模で統制された襲撃を、計画し実行することができたとすれば、それは情報局員が、イスラム主義テロリストと、緊密な政治的つながりをもっていたこと、そして、彼らの実行する襲撃を防ぐためにもっていた警備能力を、使わなかったことを意味する。

11 月 25 日の NY タイムズによると、ベルギー政府はイスラム主義容疑者のリストをもっていて、そこにはパリ襲撃に加わったベルギー在住者も含まれていた。その文面によると、「パリのテロリスト襲撃の 1 か月前、モレンビーク（ジハーディストの隠れ家として前から悪名高いブリュッセルの地区）のフランソワーズ・シェップマンズ市長は、彼女の所轄内に住むイスラム戦闘家容疑者 80 名以上の、名前と住所の載ったリストを受け取っていた。」

ベルギーの安全保障関係局内部から得た情報を引用して、タイムズはこう書いている。「こ

のリストには、11月13日のフランスの流血に参加しようとした2人の兄弟と共に、テロを計画したと疑われる男、アバウドが含まれていた。彼はモレンビークの住人で、2014年初めに、イスラム国に参加して戦うために、シリアに渡ったことがある。」

シェップマンズはこう言った、「私は彼らを、どうすればよかったというのですか？ テロを行う可能性のある者の後をつけるのは、私の仕事ではない。」彼女は、これは「連邦警察の責任」だと言った。

先週サン・ドニで、大規模な警察攻撃によって死に、パリ襲撃の首謀者と目されていたアバウドも、モレンビークの住人だった。彼は2002年から警察に知られ、2006年と2012年の間に、多くの監禁刑を受けていた。彼は、2014年2月、非信仰者の死体を乗せたトラックを運転している様子が、イスラム主義者のビデオに映り、情報関係局の監視を受けていた。6か月後に、彼の国際指名手配が出された。

タイムズの言及した2人の兄弟、ブラーヒムとサラ・アブデスラムも、モレンビークに住んでいた。ブラーヒムはヴォルテール通りで自爆し、彼の兄弟サラ・アブデスラムは現在、逃亡中である。

警察はまた、バタ克蘭劇場の自爆者オマール・イスマイル・モステファイのファイルを、彼が2013年にシリアへ渡航する前に、すでに持っていた。一方、バタ克蘭の銃撃犯サミ・アミムールは、2012年にテロ関連容疑で拘束されていた。

すでにタイムズの報道以前に、多くのメディアは、11月13日襲撃に加わった、ほとんどのイスラム主義者が、安全保障機関に知られていたことを明らかにしていた。パリ襲撃以来、フランス・イスラム主義のますます多くの専門家が、このような人物たちがフランスで活動し襲撃準備をするのを、許されていたことに驚きを表明している。

<http://www.wsws.org/en/articles/2015/11/21/pers-n21.html>

アバウドが襲撃の首謀者である可能性を突き止められたとき、フランスのジハード運動を専門とし、*French Jihadists*を書いたDavid Thomsonはこう書いた、「もしこの報道が確かなものだとすると、そのことの意味するものは、安全保障機関のメルトダウンに対する驚きを、はるかに超えるものとなるだろう。」

トムソンは説明する、「この男が誰であるか分かっているはずだ。彼はフランス語を話すジハード世界の公的な顔である。彼の顔は昨年、フランスのすべての主要なニュース・チャンネルに、数週間ぶっ通しで映し出された。2013年と2014年に、彼は自分のフェイスブッ

クのページに本名を用いて、シリアの前線で、手りゅう弾発射器を手を持ち、彼に合同するよう人々に呼びかけているビデオを掲載した。」

ヨーロッパ中を渡り歩き、大きなテロ攻撃を計画し、必要物を手に入れるアバアウドの能力は、イスラム主義テロ集団と、フランス情報部の緊密な絆を考えなければ、説明できない。情報部は彼らを、シリアの政権交替を目指す帝国主義戦争に利用し、戦わせている。こうした条件の下で、パリ襲撃犯たちは、彼らの作戦に対する公的保護に当たるものを利用することができた。

襲撃についての社会党政府の説明は、国家機関や安全保障局内部で沸き起こってきた論争の只中で、急速に信用を失いつつある。内務大臣 **Bernard Cazeneuve** はこう言っていた、「ゼロ・リスクの状況がこのような役者たちを迎え入れ、彼らは我が国とヨーロッパに、存在しない戦争を布告したのだ。」

実際、フランスの帝国主義集団内部の、どう行動すべきかについての深い分裂の中で、フランス情報部のいくつかのセクションは、社会党政権のシリアの政権交替への全面的支持を、フランスの警察行動を妨害するものだと非難している。「フランスの社会党外務大臣として **Laurent Fabius** が就任して以来、ダマスカスとのすべての接触が絶たれているのは、パリ政府がこの政権の崩壊を見込んでいるからである。…すべてのフランスのジハードイストがそこへ出かけている」と、保守党大統領ニコラ・サルコジの下にいた情報部トップの **Bernard Squarcini** は言った。

スカルチャーニは雑誌 **Valeurs actuelles** に対し、**Manuel Valls** 首相は、スカルチャーニを通して届けられた、シリアで戦っているフランス・ジハードイストについての詳細なデータを提供しようという、シリア情報部からの申し出を拒否した。ヴァルスの拒否は「イデオロギー的理由」によるものだと語った。

この政策は、フランス帝国主義と、そのアメリカを含めた **NATO** 連盟国の攻撃的な外交政策だけでなく、ヨーロッパ資本主義のエスカレートする社会的・経済的危機から、生まれたものである。支配エリートたちは、彼らの海外外交政策の手先として、イスラム・テロリスト集団を喜んで利用し、一方、国内では、民主主義的権利に対する大規模な攻撃を正当化するのに、彼らの活動を利用している。これは、いわゆる“テロとの戦い”をあざ笑うものである。

フランス社会党は、その緊縮財政政策が、昨年世論調査で 3 パーセントの承認しか得られず、大きな権力を、3 か月間の非常事態の形で警察にゆだねているが、これを更に、恒久

的非常事態としてフランス憲法の中に書き込もうと計画している。

パリ襲撃の後、**Charles Michel** 首相の右翼ベルギー政府は、先週末、ある近未来のテロ脅迫に言及して、安全保障緊急事態を宣言し、近隣の国境全体の閉鎖を命じ、イスラム主義容疑者逮捕のためと称して、大規模な警察 - 軍による行動を開始した。実は、一人の人物が拘束されただけだった。

これが、政治体制内部からの告発を含め、政府は自分の政治的目的のために事件を操作しているという、広範囲な告発に発展している。（「ブリュッセル閉鎖の公的正当化が崩れる」を見よ。 <https://www.wsws.org/en/articles/2015/11/24/brus-n24.html>）